

3. 1980年代より，三菱電気株式会社において，海外派遣社員の人材の特質を調査するために作成された「インベントリー」を使用した。

大学生の英語学力と学習実態に関する総合的研究」『筑紫女学園大学国際文化研究所論叢第3号』 pp.173-274

小張敬之・宇留野宗嗣 (1991) 「TOEFLからみた筑波大学生の英語力とその分析」
『外国語教育論集』 第13号, 筑波大学外国語センター pp.51-73

Oller, J. W. Jr., A. J. Hudson, and P. F. Liu (1977). “Attitudes and Attained Proficiency in ESL: A Sociolinguistic Study of Native Speakers of Chinese in the United States,” *Language Learning* 27, pp.1-27

——, and T. Chihara (1978). “Attitudes and Attained Proficiency in ESL: A Sociolinguistic Study of Adult Japanese Learners,” *Language Learning* 28, 1, pp. 55-68

三枝幸夫 (1990) “A Practical Criterion For Measuring English Proficiency”
『人間科学研究』 第3巻第1号 pp.133-145

Schumann J. H. (1975). “Affective Factors and the Problem of Age in Second Language Acquisition,” *Language Learning* 25, 2, pp.209-235

新城岩夫 (1976) 「英語学習の適性および動機についての一考察」『中部地区英語教育学会紀要』 6-II, pp. 14-25

Takagaki Toshiyuki (1991). “A Study on Motivation and Oral Proficiency in English”『尾道短期大学研究紀要』 第40集 pp.89-109

高梨芳郎 (1990) 「外国語学習における動機づけの役割」『福岡教育大学紀要』 第39号 第1分冊 pp. 59-73

鶴田八郎, 高梨芳郎, 村田驥一郎 (1986) 「英語学習における動機づけと学力の関係についての調査研究——中村学園大学の学生を対象に——」『中村学園大学紀要』 第19号, pp. 21-33

Yoneyama, A. (1979). “Attitudinal and Motivation Factors in Learning English as a Foreign Language,”『新潟大学教育学部紀要』 21, pp. 121-144

注

1. 『TOEIC DATA AND ANALYSIS』(第1回～第46回テスト総合結果)(1994)
2. 「現在、業務上もしくは日常生活の上で英語を使っていますか?英語を読んだり、書いたり、あるいは英語で意志疎通をはかることが必要な立場にありますか?」という設問に肯定した答え方をした大学生をさす。

あること、さらに、⑤動機づけはリスニング力には関係がないが、リーディング力と相関があること、⑥英語学力は伝達能力(Communicative Competence)を含めたリスニングに対する意識の高い者ほど全般的な学力が高いことがわかった。

名本他(1992)の調査では、「英語授業での重点領域」として、英語・英文学科の学生に「文学作品の鑑賞」を望まない割合が、他の学部・学科に比較して極端に多いことが指摘されている。本学においても、学生はコミュニケーションに役立つ実践的な授業をより多く望んでいるという意見をよく聞くが、コミュニケーションとしての英語力をつけさせるためには、読解指導中心のカリキュラムにおいても、授業では動機づけと何らかの関係があるリーディング力を養成するために論理的な読解力、思考力を要求し、一方では、リスニング力を強化するために、個人の努力を促してLL自習などで補っていく方法が効果的であろう。本研究では、結局学生の個人学習の意欲とその自主的な遂行によって英語学力に差がつくという結果が得られたが、今後は、①学習意欲が持続するような資格試験を適宜提示し、積極的な受験を促すことで、現在の英語学力を学生が絶えず確認できる学習環境を継続して設定すること、②個人の能力やペースに応じた個別学習(自習)環境を整備すること、が急務といえる。特に、リスニングは個別学習量の有無で学力に大きな差が生じている調査結果から、LLの自習用設備の効率的な運用が改めて重要視されるといえる。学生が、さらに急速に進歩してゆく情報化・国際化の社会においてコミュニケーションを図るに十分な自己認識力・表現力を習得できるにふさわしい大学の教育環境も見逃してはならないだろう。英語学力テストにproficiency testを用いる研究は長期間にわたる調査が必要となることに加えて、さらなる研究の課題としては、被験者層の拡大と質問項目の精選、英語学力テストの検討があげられる。

参考文献

Bloom, Benjamin S, J. Hastings, and George F. Madaus (1971). *Handbook on Formative and Summative Evaluation*, New York: McGraw-Hill

Gardner, R. C. and W. E. Lambert (1972). *Attitudes and Motivation in Second-Language Learning*, Rowley, Mass: Newbury House

神山正人(1984) 「外国語学習における情意的要因の役割に関する実証的研究」
Language Laboratory Vol. 21, pp. 23-40

名本幹雄, 木下正義, 宮原文夫, 村上隆太, 山中秀三, 山本廣基(1992) 「福岡県内

表6は同様に英語学力と最も相関のあった5項目を示したものである。すべて、項目(5)「英語学習の機会」と項目(6)「英語学習の自主性・積極性」に属する項目であった。自己の目標を達成するために常に基本的な易しい英語を理解し、英語の放送を積極的に見たり聞いたりする中で自分なりの学習方法を工夫し、自分の英語力を試す機会があれば積極的に参加するという姿勢がうかがえる。英語学力との関係は学習者の主体的な取り組みにおいてより強くみられるといえる。

アンケート調査の結果で興味深かった点は、ビジネスマンに対する質問である異文化適応度を調査する項目が、もともと、ビジネスマンを対象にしたコミュニケーション能力を測るテストであるTOEICと高い相関を示した点である。(.28, $p < .01$) 表7は、異文化適応に関する質問のうち最も平均の高かった5項目と英語学力と最も相関の高かった5項目を示したものである。これは、質問の特殊性にもよるが、社会人としての積極性や自己評価力・自己観察力の有無と大いに関係があるといえる。さらに、この項目は動機づけについての質問項目中「自主性・積極性」と(.27, $p < .01$), 「興味・関心」と(.24, $p < .01$)の高い相関を示している。語学に限らず、いわゆるセルフ・アイデンティティという自覚・自信の上に確立された自己表現力を身につけさせることが、大学生レベルのコミュニケーション能力の養成に有効であろうと示唆している。

表7. 異文化適応に関する質問項目と英語テスト

平均の最も高い項目	平均値	相関の最も高い項目	相関
1. 健康である	0.82	1. 説得力がある	.25
2. 日本食以外でもOK	0.78	2. 自分の考えを持っている	.19
3. 相手の話をよく聞く	0.75	2. 好奇心が強い	.19
4. 約束を守る	0.66	2. 気分転換の手段を持っている	.19
5. 家族の協力、理解がある	0.64	5. 家族の協力、理解がある	.18

7. まとめ

本論文では、TOEIC模擬試験を用いて英語学力テストを行い、学生の英語コミュニケーション能力を測定し、学年毎の学力を調べた。また、英語学習意欲の調査をおこない、どのような型の動機づけがどのように英語学力に関係しているかを調べた。これによって以下のことがわかった。①英語学力はリスニング力は1年と上級生で学力差が生じること、リーディング力は学年間の相違はないこと、②TOEICスコア600レベルを中心にした教材の選定が可能であること、③英語学力と関係がある動機づけは自主性・積極性(.25)、英語学習の機会(.23)、興味・関心(.19)であること、④異文化適応度が英語学力と関係が

8.「卒業後も英語の勉強を続けていきたいと思いませんか」(.23)が1%水準で有意であった。興味・関心の強さは、平均して3に近く(3.21)、英文学科の学生の回答としては当然の結果であったといえるが、英語学習の到達目標については、さほど考えておらず(2.86)、大学の英語の授業にはあまり興味を示していないようである(2.90)。卒業後も英語を続けていく意識の表れも含めて、授業というよりはむしろ「英語」そのものや自分自身の英語学習に対して関心が高く、英語学力との相関も高くなっている。

表5. 平均値の最も高い項目と最も低い項目

最も高い項目	平均値	最も低い項目	平均値
1. 英語が話せるようになりたいですか。(3)-2	3.97	1. 英語を話す国の人々と友人になれるから。(1)-2	1.87
2. 英語を話す能力は重要だと思いますか。(4)-3	3.97	2. 最近一年間で英語の会話力はどのくらい向上しましたか。(5)-10	2.32
3. 英語を聞く能力は重要だと思いますか。(4)-2	3.96	3. 未知語を含む教材を聞き、要点をつかむ努力をしていますか。(5)-6	2.45
4. 外国映画を字幕なしで理解できるようになりたいですか。(3)-1	3.91	4. 英語学習で大きな目標をもったとき、それに到達するために綿密な計画をたてて学習しますか。(6)-1	2.48
5. 英語で書かれた新聞・雑誌を読めたらよいと思いませんか。(3)-3	3.87	5. 最近一年間で英作文の力はどのくらい向上しましたか。(5)-9	2.52

表5は本調査の動機づけの質問項目中「学習理由」と「異文化適応に関する質問項目」を除いた46項目中で最も平均の高かったもの5項目と平均の低かったもの5項目を選択して、その平均とともに示したものである。これから、被験者集団は、英語を聞く力や話す力は特に重要であると思い(項目(4)-3,(4)-2)(平均は、3.97, 3.96)それらの達成願望は非常に強い。しかし、目標達成のための努力は、あまりせず、英語の会話力、作文力はあまり伸展してしていないと自己評価している。

表6. 相関の最も高い項目

最も高い項目	相関
1. 易しい会話(英語)を理解するようにしていますか。(5)-5	.37
2. 英語の放送は積極的に見たり聞いたりしていますか。(6)-11	.28
3. 自分の英語力を試す機会があれば積極的に参加していますか。(6)-7	.27
4. 英語の学習方法について自分なりに工夫していますか。(6)-9	.26
5. 未知語を含む教材を聞き、要点をつかむ努力をしていますか。(5)-6	.24

6. 個々の項目の検討

ここで個々の項目についてさらなる検証を行なってみる。

表4の項目(2), (3), (4)に関しては、英語学習の価値、願望、学習観はまさに英文学科学生の本分である英語学習の意義をうたった質問項目であり、英語学習への願望はおおむね伝達能力 (Communicative Competence) の習得願望を意味しているといえる。ほとんどの被験者が4 (大いに思う) の選択を行なっていることは、非常に強く認識しているという当然の結果である。したがって英語学力テストとの相関は全くあらわれなかった。

項目(5)は学習の機会についてである。授業への出席、宿題の提出 (1,2) についての質問は、平均値は高いが、英語学力との相関は低い。単独で英語学力と関係があるのは5.「易しい会話 (英語) を理解するようにしていますか」 (.37, $p < .01$), 6. 未知語を含む教材を聞き、要点をつかむ努力をつかむ努力をしていますか」 (.24, $p < .01$), 7.「常に英語を読んでいますか」 (.23, $p < .05$) であった。中でも、5の項目は、単独で英語学力との関係が最も深いことがわかった。基本を押さえて英語学習に取り組む姿勢や、たえず英語を読み、聞いている積極的な態度、努力であった。各項目の平均をみると、1.授業への出席 2.宿題の提出については 3.62, 3.66 とかなり高く4と3の回答がほとんどすべてであるが、5を除くその他の学習の機会 (努力) については平均は2.32 (10) ~2.79 (3) で3以下の回答が多いことから、主体性をもった取り組み方をしている者が高学力であるといえる。また、一年間の英語力は、わずかであるが会話力、作文力、理解力の順で (項目平均がそれぞれ2.32, 2.52, 2.76) 伸びていないとしている。Communicative Competenceの獲得意欲に反して会話力はあまりのびていないことがこの部分の回答に示されているようである。

項目(6)は自主性・積極性である。英語学習を、計画的・自主的にあるいは強い意志で積極的に推進していくことについてである。その中でも単独で11.「英語の放送は積極的に見たり聞いたりしていますか」 (.28), 7.「自分の英語力を試す機会があれば積極的に参加していますか」 (.27), 9.「英語の学習方法について自分なりに工夫していますか」 (.26) の項目が英語学力と1%で有意であった。英語学習の機会についての項目と同様にこの型の動機づけでも主に聞くことについての項目と相関が高いことが示された。4.5.はかろうじて平均が3.02, 3.00であったが、それ以外はいずれも3以下の項目平均である。自主性・積極性は一般に低いので、聞くことについての動機づけを高くもち、自主的・積極的に英語学習に取り組む者が高い学力を示す傾向にあるといえそうである。

項目(7)は興味・関心についてである。2.「英語を学ぶことに興味をもっていますか」 (.23), 6.「英語の勉強は講義以外の時でもしようと思いませんか」 (.19),

2. 英語の学習で、到達できそうもない目標があっても一生懸命努力しますか。	2.88	.72	.06
3. 英語がうまくなるためには、どんな障害でも乗り越えることができますか。	2.71	.65	.07
4. 英語の学習で困難なことにであつたら、それを乗り越えようと努力しますか。	3.02	.61	.10
5. 積極的に英語の勉強に取り組もうとしていますか。	3.00	.69	.17
6. 英語の勉強をするための時間をすすんでつくろうとしていますか。	2.84	.73	.23*
7. 自分の英語力を試す機会があれば積極的に参加していますか。	2.65	.75	.27**
8. 英語の講義のために自主的に勉強しますか。	2.73	.66	.05
9. 英語の学習方法について自分なりに工夫していますか。	2.56	.75	.26**
10. 英語や外国文化についての情報を進んで得ようとしていますか。	2.78	.76	.20
11. 英語の放送は積極的に見たり聞いたりしていますか。	2.81	.78	.28**
(7) 興味・関心 (25.68 3.66 .19*)			
1. 英語学習の到達目標について考えたことがありますか。	2.86	.80	.15
2. 英語を学ぶことに興味をもっていますか。	3.57	.54	.23*
3. 大学での英語の授業に興味をもって参加していますか。	2.90	.68	.06
4. 英語を学習しているときは楽しいですか。	3.07	.70	.14
5. 大学に入学する前と比べて英語の関心は高まりましたか。	3.08	.88	.07
6. 英語の勉強は講義以外の時でもしようと思えますか。	3.35	.67	.23*
7. 英語の成績は気になりますか。	3.30	.75	-.01
8. 卒業後も英語の勉強を続けていきたいと思えますか。	3.56	.60	.19*
(8) 異文化適応に関する質問 (9.31 3.69 .28**)			
1. 人見知りしない	0.31	.46	.15
2. 自分の考えを持っている	0.45	.50	.19*
3. 相手の話をよく聞く	0.75	.43	-.00
4. 自分の意見を批判されても冷静に耳を傾ける	0.45	.50	.10
5. スポーツ体験がある	0.60	.49	.10
6. 語学ができる	0.03	.16	.11
7. 感受性が強い	0.53	.50	.17
8. 説得力がある	0.13	1.02	.25**
9. 仕事のノウハウを知っている	0.05	.22	.05
10. 車の運転ができる	0.26	.44	.17
11. 健康である	0.82	.39	.05
12. 家族の協力、理解がある	0.64	.48	.18*
13. 責任感が強い	0.47	.50	.12
14. 約束を守る	0.66	.48	.12
15. 日本食以外でもOK	0.78	.41	.02
16. 趣味が2つ以上ある	0.61	1.08	-.09
17. クヨクヨしない、性格が明るい	0.45	.50	.08
18. 好奇心が強い	0.61	.49	.19*
19. 集中力がある	0.28	.45	-.09
20. 気分転換の手段を持っている	0.43	.50	.19*
N=119			
* r > .18, p < .05			
** r > .235, p < .01			

表4. 個々の項目の調査結果 (平均点, 標準偏差, 英語学力との相関)

(1) 英語の学習理由		奇数番号 (道具的: 11.09 2.23 -.01)		
		偶数番号 (統合的: 13.92 1.96 -.02)		
1.	単位をとるために必要であるから。	2.70	.92	-.04
2.	英語を話す国の人々と友人になれるから。	3.45	.68	.01
3.	英語を知っていれば, 社会的に高く評価されるから。	3.15	.83	.08
4.	英語を話す国の人々とその生活様式についての理解を深められるから。	3.49	.62	-.07
5.	将来就職に役にたつので。	3.37	.73	.03
6.	もっと多くの人々と話し合えるようになるから。	3.59	.65	.01
7.	英語が流暢に話せなければ, 教育を受けた人といえないと思うから。	1.87	.76	-.09
8.	英語を話す国の人々の考え方や行動がわかるようになるから。	3.40	.68	-.02
(2) 英語学習の価値 (21.77 1.96 -.03)				
1.	外国文化を身につけるのは重要だと思いますか。	3.61	.55	-.07
2.	外国文化を理解する上で, 英語学習は大切だと思いますか。	3.82	.40	-.14
3.	外国語学習は生活の中で有意義だと思いますか。	3.46	.62	-.06
4.	視野を広げるのに英語学習は有意義ですか。	3.75	.49	.13
5.	英語学習は自国語と外国語の相違を意識させますか。	3.50	.65	.04
6.	英語学習は外国語と外国文化の意識を高めることになりますか。	3.61	.54	-.03
(3) 英語学習への願望 (15.57 1.02 .08)				
1.	外国映画を字幕なしで理解できるようになりたいですか。	3.91	.29	.02
2.	英語が話せるようになりたいですか。	3.97	.18	.04
3.	英語で書かれた新聞・雑誌を読めたらよいと思いますか。	3.87	.34	.02
4.	外国人に英語で自分の思うことを作文できるようになりたいと思いますか。	3.83	.44	.15
(4) 英語学習観 (25.42 2.02 -.01)				
1.	英語で書く能力は重要だと思いますか。	3.64	.55	.03
2.	英語を聞く能力は重要だと思いますか。	3.96	.20	-.07
3.	英語を話す能力は重要だと思いますか。	3.97	.18	-.12
4.	英語で書かれた本を読む能力は重要だと思いますか。	3.64	.48	-.05
5.	暇な時間があれば, 英語を学習すべきだと思いますか。	3.32	.62	.04
6.	英語の文法の力は重要だと思いますか。	3.23	.57	.04
7.	英語の語彙力は必要だと思いますか。	3.67	.52	-.05
(5) 英語学習の機会 (28.91 3.99 .23*)				
1.	英語の授業には必ず出席しますか。	3.62	.52	.02
2.	宿題が出たら提出期限を守りますか。	3.66	.55	.12
3.	テストで自分の間違ったところを後で調べていますか。	2.79	.74	-.10
4.	日常, 自分の知っている英語 (単語) で表現するように心がけていますか。	2.75	.82	.15
5.	易しい会話 (英語) を理解するようにしていますか。	3.43	.69	.37**
6.	未知語を含む教材を聞き, 要点をつかむ努力をしていますか。	2.45	.84	.24**
7.	常に英語を読んでいますか。	2.61	.80	.23*
8.	最近一年間で英語の理解力はどのくらい向上しましたか。	2.76	.62	.13
9.	最近一年間で英語の作文力はどのくらい向上しましたか。	2.52	.68	-.00
10.	最近一年間で英語の会話力はどのくらい向上しましたか。	2.32	.67	.11
(6) 自主性・積極性 (30.45 5.26 .25**)				
1.	英語学習で大きな目標をもったとき, それに到達するために綿密な計画をたてて学習しますか。	2.48	.71	.11

仮説2を検証するために、英語学力テスト得点と「英語の価値」「英語学習への願望」「英語学習観」の各得点との相関を求めた。結果は表3に示したように、それぞれ順に $-.03$, $.08$, $-.01$ と総て無相関であった。

一方、英語学力テスト得点と「英語学習の機会」「自主性・積極性」「興味・関心」の各得点との相関は表3に示したように $.23$ ($p < .05$), $.25$ ($p < .01$), $.19$ ($p < .05$)で総て有意であった。

さらに、①英語学力テスト得点と「英語学習の価値」「英語学習への願望」「英語学習観」の3項目を合わせた「英語学習の必要性」の得点との相関、②英語学力テスト得点と「英語学習の機会」「自主性・積極性」「興味・関心」の3項目を合わせた「英語学習への取り組み方」の得点との相関を求めたところ、前者は $.00$ で有意差はなく、後者は $.27$ ($p < .01$)で相関がみられた。「英語学習の取り組み方」のみが英語学力と関係があるといえる。四年制の大学生を被験者として行なった先行研究では(鶴田他(1986), 高梨(1990)), 「英語学習の必要性」と「英語学習の取り組み方」の双方に有意差がみられたが、今回の研究では被験者が英文学科の学生のために「必要性」は、ほとんどすべての学生が十分感じているために有意差がみられなかったといえる。これらの結果から、仮説2を幾分修正して、「英語学習の取り組み方」は英語学力と関係があるが、「英語学習の必要性」は英語学力と関係がないといえる。

「英語学習の必要性」「英語学習の取り組み方」「必要性和取り組み方」「全てのアンケートの調査結果」と英語学力テストの技能別(Listening, Reading)の相関を調べたところ、「英語学習の取り組み方」及び「全てのアンケートの調査結果」の2つのタイプがReading得点とそれぞれ $.25$, $.24$ の相関が見られ、全て $p < .001$ で有意であった。

仮説3を検証するために、道具的学習理由(4項目)、統合的学習理由(4項目)と異文化適応に関する質問項目(20項目)と英語学力テストの得点との相関を調べたところ、 $-.01$, $-.02$, $.25$ ($p < .01$)の相関があり、英語学力テストと異文化適応に関する質問項目との相関のみが有意であった。仮説は一部のみ支持された。これは、本来、被験者を含めた日本人学習者には道具的動機づけと統合的動機づけが混在しており、8つという項目数では回答に差が生じなかったということがいえる。また、日本の教育環境では統合的と道具的という2つの概念はわれわれ日本人の中に混沌としており、大学生が日常生活においてははっきりと認識する機会がないことが理由としてあげられる。本研究での被験者は英文学科の学生という特殊性もあり、無難な答え方をしたため、被験者の等質性がここでもみられた。今後は、この観点からも被験者層の拡大が必要とされる。

5. 仮説の検証と考察

本論文の仮説を検証するために、アンケート調査結果の各項目毎の平均、標準偏差 (SD) を求めた。

仮説1を証明するために、英語学力テスト得点とアンケート結果全体(74項目)との相関を求めた。この結果は表1に、それぞれの満点(総得点)、平均、標準偏差とともに示した。英語学力テストの平均は52.36で、標準偏差は7.17であり、適度な難易度と分布のテストであった。アンケート結果は全体の平均が182.12で、標準偏差が15.42の調査であった。これらの得点間の相関は.25で $p < .01$ で有意であった。この調査では、仮説1は正しいことが示された。英語学習に対する動機づけは一般的に英語学力と関係がある。英語学力の高い学習者ほど英語学習に対する動機づけが強い、と言える。

表3. アンケート結果と英語学力テストとの相関 (N=119)

	項目数	満点	平均点	項目平均	標準偏差	英語得点との相関
英語の学習理由 (道具的)	4	16	11.09	2.77	2.23	-.01
英語の学習理由 (統合的)	4	16	13.92	3.48	1.96	-.02
英語学習の必要性	17	68	62.76	3.69	3.75	.00
英語学習の価値	6	24	21.77	3.63	1.96	-.03
英語学習への願望	4	16	15.57	3.89	1.02	.08
英語学習観	7	28	25.42	3.63	2.02	-.01
英語学習への取り組み方	29	116	85.03	2.93	11.04	.27**
英語学習の機会	10	40	28.91	2.89	3.99	.23*
自主性・積極性	11	44	30.45	2.77	5.26	.25**
興味・関心	8	32	25.68	3.21	3.66	.19*
(必要性+取り組み方)	46	184	147.79	3.21	13.08	.22*
異文化適応度	20	20	9.31	0.47	3.69	.28**
総計	74	236	182.12		15.42	.25**

* $r > .18$, $p < .05$

** $r > .235$, $p < .01$

英語の4技能をバランスよく学ぶことに意義を見いだしているために、より統合的な回答をする傾向にあるという結果が得られている。本研究では、被験者である英文学専攻の学生の学習環境を考慮して統合的動機づけも道具的動機づけも英語学力に対して、何らかの関係があると推測した。さらに人材能力開発のためのアンケート調査項目である異文化適応に関する質問項目³⁾も加えて、英語文化圏への適応度も英語学習へ与える影響力があり、相関があると仮説を設定した。

以上の理由から本論文では、3つの仮説を設定した。

仮説 1. 英語学力に対する動機づけは、全ての英語学力と関係がある。英語学力の高い学習者ほど英語学習に対する動機づけが強い。

仮説 2. 『英語学習への取り組み方』即ち「学習の機会」「自主性・積極性」「興味・関心」の各型の動機づけは英語学力と関係があるが、『英語学習の必要性』即ち「学習の価値」「願望」「学習観」の各型の動機づけは、英語学習との関係はうすい。

仮説 3. 統合的動機づけ、道具的動機づけ、異文化適応の質問項目という3つのタイプの動機づけは英語学力と関係がある。

4. 方法

福岡女子大学英文学科の学生(1～3年)119名を対象にしてアンケート調査と英語学力テストを1992年6月に実施した。調査した項目は、項目(1)は Gardner & Lambert (1972) の「Orientation Index」を和訳、修正した英語学習に対する動機づけのアンケート、項目(2)～(7)は「外国語についての態度調査アンケート」、項目(8)は異文化適応に関する質問項目であった。アンケートの調査項目は全74項目で、その内容は、①英語学習の必要性について(17項目)(英語学習の価値6項目、英語学習への願望4項目、英語学習観7項目)と②英語学習の取り組み方について(29項目)(英語学習の機会10項目、自主性・積極性11項目、興味・関心8項目)③異文化適応に関する項目(20項目)であった。①および②については、各項目とも4つの選択肢があり、それらは4～1の順に動機づけの強さの順で配列されている。(4「大いに思う」、3「やや思う」、2「あまり思わない」、1「全く思わない」の選択肢を提示した。)これらの選択肢を選択することによってその項目における動機づけの強さを自己評価するようになっている。③については、該当するかしないか(1または0)で回答させた。英語学力テストの得点とアンケート結果の動機づけの強さとの関係を両者の相関を求めて検討した。(英語学力テストについては92ページ参照)

ことができる」や、「英語の講義のため自主的に勉強する」などの型の動機づけで、動機づけの機能の1つである持続という点から動機づけを類別したものである。一方、興味・関心は、方向づけの機能という点から動機づけを分類したもので、「大学での英語の授業に興味をもって参加している」といった型の動機づけである。(英語学習の必要性和取り組み方についての項目については表4(101～102ページ)を参照。)

3. 仮説

英語学習の必要性和英語学習の取り組み方の2つの型の動機づけを英語学力との関連で比較すると、前者は英語学力と関係がみられないが、後者は英語学力と関係があると仮定できる。英語学習の必要性に属する、英語学習の価値や願望や英語学習観はいずれも英語学力の相違に関係なく、学習者を通じて比較的高いであろう。学力の下位の学習者でも英語学習の価値や各能力の重要さは十分認識しているであろうし、英語学習に対する願望も強いと考えられるからである。英語学習の必要性は自己の理想や理念に属するもので、直接英語の学習活動には反映しないと思われる。これに比べて、英語学習への取り組み方は英語学習の機会、自主性・積極性、興味・関心といったもので、これらはいずれも学習活動を直接的に推進するであろうし、これらの動機づけの強いものは英語学力も高いであろう。

Gardner & Lambert (1972) の分類によると、統合的動機づけによる学習者は、よく知られているように、目標言語の文化・社会への理解、同化を志向する。これに対して、道具的動機づけによる学習者は「将来、就職に役にたつので」というように、言語学習に功利的な価値を求めて学習する。統合的動機づけや道具的動機づけが日本での英語学習にどのように関わるかについては Lambert らの Orientation Index を用いて、これまでいくつかの研究がなされている。英語学力テストとして、いわゆる到達度テストを用いた例としては、新城 (1976) は高専生160名を対象にして、「総合テスト」との相関を(.060, .091), Yoneyama (1979) は中学生123名を対象にして「定期テスト」の成績との相関を調べている(.054, .199)。また、熟達度テストとの相関を Chihara and Oller (1978) では YMCA の生徒123名について検討し、.15, .04 の相関であった。また、クローズ得点との相関を調べた例として、神山(1984) は中学2年生76名を被験者にした場合、両相関は,.25, -.25であった、としている。しかしながら、これらの研究では相関はほとんど見られず、相関の仕方も一様でない。Takagaki (1991) の検証では、四年制大学生、短期大学生、英語専門学校生を対象に行なった調査で、後者二者に比較して四年制大学生は、

英語との背景が異なっている点で動機づけと学力の関係は低いと報告している。神山(1984)が言うように、日本での動機づけと英語学力の関係は①動機づけという情意的要因の尺度の問題、②英語能力を測定する測度の問題、③被験者の学習経験の問題などが残されている。

しかしながら、本研究では両者の有意な関係が証明された新城(1976)、神山(1984)、高梨(1990)などのいくつかの先行研究をふまえて、Bloom(1971)の仮説に基づき、「動機づけと学習成績は相互依存の関係がある」という理論を支持するかたちで仮説をたてて研究をすすめることにする。

人間や動物の行動を始発させ、方向づけや持続させ強化する過程をさす「動機づけ」を英語学習の文脈でとらえれば英語の学習活動を始発させ、方向づけ、持続、強化を行なう過程であるといえる。英語学習に対する動機づけは、この意味で英語学習の大きな推進力でもあるといえる。しかしながら、動機づけのみが英語学習の成果に関わるのではない。教授法、教材などの他に、学習者の諸要因との相互作用を通して英語学習の成果に関係する、といえる。だが、一般的には、英語学習に対する動機づけが高ければ、それだけ学習活動は活発で持続力のあるものになり、英語学習の成果は高まる、と仮定できる。従って、英語学習に対する動機づけが高い学習者ほど英語学力も高い傾向にある、といえる。

2. 動機づけのタイプとその分類

英語学習に対する動機づけにはさまざまな型がある。これらの動機づけの型を次のように整理した。まず、英語学習に対する動機づけは、英語学習の必要性和英語学習への取り組み方に分類できる。英語学習の必要性は、動機(motive)や目標(goal)の観点から動機づけの型をとらえたものである。これには、①英語学習の価値、②英語学習への願望、③英語学習観が含まれる。英語学習の価値は、「外国文化を理解する上で、英語学習は大切であると思う」といった、英語学習の価値観による動機づけである。これに対して、英語学習への願望は、「英語が話せるようになりたい」といった、願望による動機づけである。一方、英語学習観は、「英語を聞く能力は重要であると思う」といった、英語の能力や学習の仕方についての考え方による動機づけである。英語学習への取り組み方は、①英語学習の機会、②自主性・積極性、③興味・関心が含まれる。英語学習の機会は、動機づけの強化や調整の機能に焦点をあてたもので、「テストでの自分の間違いをあとで調べる」や、「やさしい会話を理解するようにしている」といった、自ら英語学習の機会をつくろうとする型の動機づけである。自主性・積極性は、「英語がうまくなるためにはどんな障害でも乗り切る

本研究の被験者は導入以前の入学者で、調査時期が6月ということもあり、コミュニケーションを重視されていない「受験英語教育」を終えたばかりの高校卒業程度の聴解力を示しているといえよう。上級生のリスニング得点が高かったのは、英語学習経験年数とは別に、個人学習時間の増加も理由として考えられる。教養科目の取得に追われがちな1年次に、時間割中に、自習時間を見いだすのは困難であろう。また、TOEIC という一斉客観テストの形態に十分慣れていなかったであろうことも原因としてはあげられる。今後もリスニング力の差が生じてくる原因・時期の調査は興味深い課題といえる。

本調査では学生の現状の学力では、留学するに妥当な TOEIC スコア730までは、不十分であると判明したが、スコア600を当座の目標に、さらなる英語力の伸展を目指すことが可能ではないかと考えられる。(奇しくも平成6年度の福岡県教育職員採用試験で英語検定1級・TOEFL 550点・TOEIC 730点資格取得者は一次の筆記試験が免除される措置がとられた。今後、社会人としての英語コミュニケーション能力は、必須の条件とみなされるようである。) 今回の、英語学力テストは合否で判定されず、得点によって結果表示される TOEIC を採用したが、「実際のコミュニケーションに即した英語」が設問となっている問題内容は学生にとっては関心も高く、興味をひくものであった。語学の学習を推進する大きな原動力である「興味の持続」という点からも自学自習に適した教材といえるであろう。

Ⅲ. 英語学習意欲の調査

1. 英語教育と動機づけ

動機づけ (motivation) が第2言語学習の成果に影響することは経験的にもよく知られている。Schumann(1975)の言うように、第2言語習得に関する因子として、教授法、年令、適性の他に、情意因子として態度 (attitude)、動機づけ (motivation)、感情移入 (empathy) が大きく関与しており、今後も研究の必要の余地があるとされている。

言語学習においては、さまざまな因子が複雑に絡み合っている中で、動機づけが高ければ高いほど学習活動は活発で持続力あるものになり、学習成果は高まることになると言える。

LL実習に携わる者としては、学生に対してのひとことの「言葉かけ」が大きな動機づけとなり、積極的な自学自習への第一歩となる可能性を絶えず秘めたものであることを考えると動機づけは極めて重要な因子であるといえる。

動機づけと学力の関係については Oller, et al (1977,1978) は英語が「外国語」として位置付けられている日本では、西洋における「第2言語」としての

開テスト平均、および大学生平均がいずれもSection I(Listening) > Section II という結果から、本学平均スコア500とスコア550～600の違いを考察してみる。

三枝(1990)は「TOEICスコア600までは人工的な努力で得点できるが、それ以上は英語母国語話者との interaction によって得点できるといえる。また、このレベルは、海外業務を遂行するうえで要求される最低限の英語力を意味している。」と調査報告している。スコア500では英語のスピードに慣れていないという状況があることが報告されたが、英文を英語の語順で理解するリスニング力がつければ、英語の意味の理解が増し、リーディング力が増長される。まさに、リスニング力とリーディング力は相補的な関係となるのが理想的であろう。リーディング力にともないリスニング力もスピードの点で相互に関係してくるのがスコア600レベルであるといわれる。(三枝)

本学では1993年1月より団体受験制度を導入し、任意で受験者を募り、既に4回おこなっている。延べ94名が受験し、総合計の平均点は560.8点～612.9点であった。団体受験の平均点の総てはSection I (Listening) > Section II (Reading) という結果であった。日本の英語学習環境でも、個人の努力によりスコア600までは得点できるということと、本学でおこなった団体受験での平均値(スコア600前後)の結果は、TOEICスコア600が海外渡航への最低限の必要な英語力を示していることも含めて、英文学科学生への英語熟達度の一目標として今後も提示できるスコアであろう。スコア600レベルではリスニング力がリーディング力を上回っている結果からスコア500をスコア600レベルに引き上げるには、英語の早さに慣れ、英語の語順で理解できるようになるためのリスニングの集中訓練が必要とされるであろう。

英語技能別の力をみるために Listening, Reading, Total の学年毎の得点の平均値を出し、分散分析を行なったところ結果は、Total では1～2年間($F=2.85, p<.01$)と1～3年間($F=3.20, p<.01$)で有意差があった。この場合 Reading にはほとんど得点差はなく学年間の有意差は見られなかった。しかしながら、Listening において1～2年間($F=4.47, p<.001$)と1～3年間($F=3.41, p<.001$)で有意差が見られた。

リーディング力は3学年を通じて平均している。このことは、高校、大学入試の英語学習法を考慮すると文法がリスニングよりも、より得点に結びつく学習方法でおこなわれてきた側面を示唆している。特に、1年生が他学年と差異なく得点したことからもいえる。また、英文学専攻の被験者であることから、リーディング力、文法力は学年を追っても変わらない(維持している)といえる。リスニング力は1年と2年、1年と3年で有意な得点差が得られた。1994年より、高校の教育課程に「オーラル・コミュニケーション」が導入されたが、

表2. 英語学力テストの学年別平均値と標準偏差

	Section I (Listening)		Section II (Reading)		TOTAL	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1 年	20.66	4.24	28.50	4.76	49.16	7.45
2 年	25.12	4.60	28.42	4.09	53.54	6.81
3 年	24.16	4.39	30.08	3.67	54.24	6.13
平均	23.39	4.81	28.98	4.26	52.36	7.17

本調査の結果から、次の三点がわかった。

①本学の平均スコアは、約500程度と推測される。(TOEIC公開テストの平均スコアは約560) 正答率はリスニング約47% (公開テスト平均約61%), リーディング約58% (公開テスト平均約52%) であった。

②リスニングとリーディングの技能別の得点は、公開テスト平均ではSection I (Listening) > Section II (Reading)であったのに対し, 本学の受験者平均では, Section I (Listening) < Section II (Reading)であった。

③学年間では1 - 2 年間と1 - 3 年間にリスニングにおいて有意差がみられた。

本研究では、採点方法も全くのrow score (1問1点)で行なったので、正確には TOEICの点数として換算することは不可能であるが、設問の解答率から、おおよそTOEICスコア500前後ではないかと推測される。このレベルは「ゆっくり話してもらうか、繰り返しや言い換えをしてもらえば、簡単な会話は理解できる。身近な話題であれば応答も可能である。」程度のレベルとみなされている。TOEICは短時間で問題を処理するテストのために、英文を英語の語順で理解して解答するのがコツでもある。このために英語のスピードに慣れきっていない場合や、実際に会話体の表現を認知できない場合には、設問の最後まで至らない。本被験者が各パートの後半部ほど正答率が低くなっており、設問の未解答の割合が全学年を通じて後半部に多いことと考え合わせてみて、TOEFLと同様にTOEIC受験に際しては体力・集中力の維持も重要な点であるといえる。スコア500では、海外で業務をおこなうには不十分な英語力といえる。

また、本調査でのスコア平均500レベルでは、Section別の平均が、全学年を通してSection I (Listening) < Section II (Reading) という結果であった。公

係しているかを調査すること、③さらに、両者の調査結果をふまえて、就職・留学の際の学習指導のあり方について考察することである。

II. 学力テストの結果と考察

1. 英語学力試験として用いたTOEICについて

TOEICは2時間(120分)で200問に答える英語の一斉客観テストであり、Section I (Listening) の100問は45分、Section II (Reading) の100問は75分の解答時間が与えられている。Section I はPart I「写真描写問題」、Part II「応答問題」、Part III「会話問題」、Part IV「説明文問題」の4パートから成り立ち、Section IIはPart V「文法・語彙問題」、Part VI「誤文訂正問題」、Part VII「読解問題」の3パートから成り立っている。

TOEICのスコアは試験の素点 (raw score) を偏差値 (converted score) に直したものであり、自分が全体の中でどの位置にいるのかを示している。最高が990点で最低が10点である。TOEIC運営委員会の報告によると¹⁾ 1994年5月に行なわれたTOEIC第40回の公開テストの受験者は37,725名で、平均点は558点であった。日常生活で英語を使っている大学生²⁾ は1364名で平均スコアは650点 (Listening 330点, Reading 320点)、その他の大学生は628名で平均スコアは554点 (Listening 293点, Reading 261点) であった。同運営委員会によれば一般的には学校英語平均レベル (日本の大学卒業時の平均的な英語力) はスコア350点程度だといわれている。このことを考慮すると実際に決して安くはない受験料 (6,490円) を支払って受験する公開テストの受験者の英語に対する意識は非常に高く、実際の英語力のレベルも高いといえる。社会人もふくめての総受験者の平均スコアの Section別平均点が Listening 300点, Reading 258点で Section I (Listening) > Section II (Reading) となっている。

2. 福岡女子大学で行なったTOEIC模擬試験の解釈について

本研究では、時間的な制約もあり各パートの半量の問題を英語学力テスト問題とした。英語学力テストの平均と標準偏差、学年毎のSection別平均点と標準偏差を表にすると表1および表2のようになる。

表1. 英語学力テストの平均と標準偏差

	項目数	満 点	平均点	標準偏差	Totalとの相関
Listening	50	50	23.39	4.81	.82
Reading	50	50	28.98	4.26	.76
Total	100	100	52.36	7.17	

英語学習における英語学力と 学習意欲の関係についての調査研究

——TOEIC模擬試験とアンケートを用いての一考察——

田 上 優 子

I. 問 題

もともと企業からの要請でコミュニケーションとして英語を使うビジネスマン向けに作成された英語学力テストにTOEICがあるが、近年、就職内定の際に大学生に対しても受験を課する企業が職種を問わず増加してきた。

また、最近では海外渡航が身近なものになってきた反面、自らの語学レベルを的確にチェックしないまま安易に留学を決定し、実現する学生も少なからずいる。彼らは、異文化理解というよりはむしろ異国への憧憬の思いに駆られて、これといった目的もなく留学に臨んでいるようにも見える。

このような状況を考慮して、今回はTOEFLと同様に信頼性・妥当性の面で支障ないとされるTOEIC（模擬試験）を英語学力テストとして用い、学生のコミュニケーションとしての現状の英語レベルを調査した。また、テスト自体を就職、留学を控えた学生への英語学習の動機づけの一つとして提示する機会とした。

TOEFLと同じくTOEICの問題作成にあたっているアメリカの公共テスト機構ETS（Educational Testing Service）によると換算式でTOEIC730点がTOEFL550点に相当すると報告されている。これは「どんな状況でも英語で適切な対応ができ、大学院への留学が許可される基準点である」という能力を示している。刻々と変化する国際化社会において、文字どおり国際人として、異文化間のコミュニケーションを成立させるに足るTOEIC730点レベルは英語学力のひとつの指針といえる。

本研究の目的は、英語学力テスト（TOEIC模擬試験）と学習意欲の調査を実施し、①学部学生の現状の英語コミュニケーション能力を測定し、学年ごとの学力を調査すること、②どのような型の動機づけがどのように英語学力にに関